



文化外交の精華

(東京外国語大学教授
国際関係論・現代中国学)

中嶋 嶺 雄

どんなことになるかと大いに懸念された日米首脳会談も、どうやら成功裏に終わって、大平政権は一つのハードルを飛び越えた感がある。今回の首脳会談ほど難問を潜在させていた日米交渉はなかつただけに、

交本来の姿が形がい化してしまふからである。(中略)

会談の背後にいた外務省首脳の努力が並々ならぬものであったことも察せられる。今回の日米交渉は、経済外交の難しさを教え、また、わが国の官僚が国際経済の専門家として大きく成長している事実を知らせてくれた。来るべき東京サミットのプレリウドとしては、絶好の機会でもあったといえよう。

「私の娘のエミリーは日本の鈴木メソッドでバイオリンを学んでいます」と語つてくれたのは、まことに意義深いことであつたし、文化外交とは何であるのかを改めて考えさせてくれた。

しかし、首脳外交の影武者として、官僚層が大きな役割を演ずることには、大きな落とし穴があることもいうまでもない。事柄が専門化しすぎ、詳細にわたりすぎて、首脳者同士がステーツマンとして現代世界を論じ、現代文明を語り合うという首脳外

才能教育の鈴木鎮一氏が始められたバイオリン教育法のことであり、「どんな子供でも母国語が話せるように、どんな子供でもバイオリンが上手になる」との信念を抱かれて、信州・松本の才能教育研究会を母体に、いまや全世界に広まっている音楽教育運動のことである。一般にはあまり知られていないが、才能教育研究会の成果は、鄧小平中国副首相初来日の際にも首相官邸

で披露され、また、アメリカではすでに十万人にのぼる子供たちが「鈴木メソッド」でバイオリンを学びつつあり、カーター大統領は昨年、鈴木氏が率いたアメリカにおける日米の子供たちのバイオリンのすばらしい合奏を聴いて感激し、舞台上で登壇して鈴木氏に賛嘆の言葉を語っているのである。

文化外交の重要性が唱えられて久しいが、それはもはや、能、歌舞伎、また生け花、茶道などわが国の伝統芸能だけを一方的に輸出しているいい時代ではなくなりつつある。それだけに、バイオリン教育というような、わが国が西洋から受容しつつも、その獨創性のゆえに高い水準に達し、しかも普遍的な価値を有するものこそ、文化外交の精華たり得るのである。

「鈴木メソッド」は、そうした輝かしい事例であるが、顧みれば、それはあくまでも民間の「文化外交」なのであり、文化外交を唱えているわが国政府の外務省からも文部省からも、これまでなら援助の手がさしのべられたことはなかつたのである。

(「時事解説」昭和五十四年五月十五日号
より転載)